関連団体

2023年「ガラス産業連合会 新年会」報告

（一社）ニューガラスフォーラム事務局

Report on the 2023 New Year Gathering of the Glass Industry Conference

New Glass Forum

左から，電気硝子工業会，板硝子協会，硝子繊維協会，一般社団法人日本硝子製品工業会及び日本ガラスびん協会，一般社団法人ニューガラスフォーラムの各会長

2023年1月20日㈮，ガラス産業連合会（GIC）新年会が，東京都千代田区の如水会館での対面とYouTube同時配信のハイブリッド形式で開催されました。昨年は新型コロナ感染拡大のためWeb開催となりましたが，今年は参加人数を限定させていただいた形ではありますが，無事対面にて開催することができました。会場出席者が107名，リアルタイムでのYouTube視聴者が48名，計155名の方が参加されました。

この新年会は，ガラス産業連合会に加盟する板硝子協会，硝子繊維協会，電気硝子工業会，一般社団法人日本硝子製品工業会，日本ガラスびん協会，および一般社団法人ニューガラスフォーラム（NGF）の6団体で主催しており，今年は電気硝子工業会の太田専務理事の司会で行われました。

最初に加盟6団体の，森山賢三 電気硝子工業会会長（AGC株式会社 専務執行役員 電子カン

パニープレジデント），清水正 板硝子協会会長（セントラル硝子株式会社 代表取締役 社長執行役員），松永隆延 硝子繊維協会会長（日東紡績株式会社 上席執行役グラスファイバー事業部門 副部門長 兼 パラマウント硝子工業株式会社 代表取締役社長），山村幸治 日本硝子製品工業会会長兼日本ガラスびん協会会長（日本山村硝子株式会社 代表取締役 社長執行役員），森重樹 ニューガラスフォーラム会長（日本板硝子株式会社 取締役 代表執行役社長兼 CEO）の各会長が順に紹介されました。その後，ガラス産業連合会の森山会長から新年のご挨拶がありました。その要旨は以下の通りです。

昨年は，ロシアによるウクライナ侵攻を契機とした世界的なエネルギー価格の高騰とインフレーションの進行，金融面では急激な為替変動が生じ，まさに激動と混迷の一年であった。一方で新型コロナに関しては，依然として感染リスクは残るものの，世界中で人の移動や生活などが常態に戻る動きが鮮明になってきている。

このような状況の中，GIC および加盟 6 団体の活動を振り返ると，政府の 2050 年カーボンニュートラル実現の方針に対応した動き，国際ガラス年への取り組み，及びガラス研究振興プログラムによる研究者への助成の開始が大きなトピックスであった。

2050 年カーボンニュートラル実現に向けた動きについては，板硝子協会による「板ガラス産業の 2050 カーボンニュートラルへのビジョン 2022 」の策定・発表と特別委員会の設置，硝子繊維協会による「グラスウールアクション 2030 」策定，日本ガラスびん協会の英国脱炭素化技術開発団体への加盟など，各加盟団体が色々な活動を開始した。また，GIC として各団体の CO_2 排出量を集計して HP 上で公表することでカーボンニュートラルに向けた意識づけを継続している他，地球環境やカーボンニュートラルをテーマにした講演会等を開催している。今後もこの活動を継続していきたい。

2022 年は国際ガラス年であり，GIC もその記念活動を支援する目的で国際ガラス年 2022 支援 WG を組織し，国際ガラス年実行委員会が開催する記念行事への支援や GIC 独自の記念活動を実施した。その一環として，次世代を担う青少年達にガラスについて知っていただく活動として「青少年のための科学の祭典大阪大会」に日常生活の中で活躍する様々なガラス製品を出展した。小中高生や保護者など 2 日間で 1000 人を超える入場者があり，大盛況であった。また，多くの方々に様々なガラスの製造工程を知っていただくことを目的として，各種ガラスの製造工程を紹介する動画を制作し GIC の HP に掲載した。このように GIC にとっても 2022 年は記念すべき特別な一年となった。

ガラス研究振興プログラムは我が国の大学におけるガラスの基礎的研究を扱う研究者の減少という現状を踏まえ，ガラス産業の将来を担う人材育成の基盤づくりを目的として，GIC と NGF の共催で主要なガラス会社・団体の協賛を得て立ち上げた。このプログラムは大学等の若手研究者が実施するガラス産業に役立つ基礎的な研究に対して助成を行うことにより，ガラス産業界が将来に渡って持続的に発展することを期待して実施している。昨年 3 月に 2022 年度研究テーマ 2 件を採択し，5 月より研究がスタートしている。2023 年度に向けては，昨秋より研究テーマ募集を行い，この 1 月から審査を開始し，3 月中には採択テーマが決定される。

2023年のGICの取り組みについては，加盟6団体が一致団結し，官庁，学界のご指導の下，各部会が協調して継続的な活動を行っていく。GICは未来に向けてガラス産業の総合的な発展に貢献し，持続可能でより快適な社会の実現に寄与していきたい。引き続きGICの活動に変わらぬご支援，ご協力を宜しくお願いしたい。

次に，ご来賓の恒藤晃 経済産業省大臣官房審議官からご挨拶があり，その要旨は次の通りでした。

年が明け2023年となったが，新型コロナウイルスの感染流行は収まりきっておらず，ロシアによるウクライナ侵攻，それに伴う資源価格，原料価格の高騰，世界的なサプライチェーンの混乱などにも引き続き対応が必要な状況である。中長期的な課題として，カーボンニュートラル，循環型社会の実現，また少子化および人口減少等の課題への対応が必要である。そしてまずは，日本経済のデフレからの脱却，安定成長への軌道に乗せることが求められている。日本が様々な課題を克服し発展していく上でガラス産業の果たす役割は極めて大きい。カーボンニュートラルの達成には，住宅の断熱性能の向上，車の軽量化が不可欠であり，デジタルトランスフォーメーションを支える通信機器やヘルスケア部門の発展にもガラス素材が重要である。2023年を日本が新たな成長軌道に乗るスタートの年としたい。新たな製品開発への投資などを積極的に進めていただき日本をリードしていただきたい。そのために重要なのは，まず人材であり，賃上げも含めて人材への投資をお願いしたい。GICでは青少年向けの取り組みを進めている旨の話があったが，素晴らしい取り組みと考える。会員各社も優秀な若者にガラス産業に入ってもらうように採用も含めて進めていただきたい。政府としても今回の補正予算で支援策を盛り込んでいる。経済産業省でも皆様の取り組みを支援していく。

経済産業省の最重要課題の一つは福島の復興であり，現在アルプス処理水の放出準備を進めている。併せて三陸・常磐地域の水産業の復興を図るべく，水産物の売り手と買い手をつなぐネットワークを立ち上げた。産業界の皆様にも広くご参加いただきたい。

日本でガラス製品を作り始めたのは，概ね1600年代である。300～400年に渡り，様々な環境変化を乗り越えて新たな製品や素材の開発を進め，人々の生活を豊かにして我が国の発展や地域の雇用を支えてきた。今度は我々の世代が様々な課題を克服し，日本経済を新たな成長軌道に乗せ，次の世代に向けてバトンを渡す番である。政府も皆様と一緒になって取り組みを進めていきたい。

2023年がガラス産業に携わる皆様にとって安全で事故の無い年となること，新たな発展に向けた素晴らしい年となることを心より祈念する。

その後，ご来賓の井上博之 東京大学教授／元国際ガラス年日本実行委員会実行副委員長からご挨拶があり，国際ガラス年についての活動紹介がありました。その要旨は次の通りでした。

本日は，国際ガラス年日本実行委員会副委員長として国際ガラス年の活動について紹介する。この実行委員会は，日本セラミックス協会のもとに2021年に組織され，2022年の様々なイベントを企画し実行した。一部のイベントについては文部科学省，経済産業省，外務省の後援をいただいた。GICでもIYOG支援WGを組織し，様々なイベントの支援，ガラス製品の展示会等を行っていただいた。また，多くの企業から総額約1500万円の資金援助を頂いており，心から感謝を申し上げたい。

国内では，67件のイベントを開催するとともに国際ガラス年のためのHPを開設し，ガラスに関する様々な知識と178名のガラス工芸作家の作品へのリンクを掲載するなどガラスの魅力やその可能性を提示した。主な国内イベントは以下の通りである。

・国際ガラス年日本オープニングセレモニー
　講演会（1月28日）
・文部科学省 科学技術週間（4月18～24日）
　学習資料「一家に1枚」（ガラス）の配布
・ガラスの無い世界ある世界　静止画および動画コンテスト（6月1日～8月31日）
・学会誌での特集号刊行
　また主な国際的イベントは次の通りである。
・国際ガラス年2022国際開会式
　スイス・ジュネーブ欧州国連本部
　（2月10～11日）
・National Day of Glass
　The Madison Washington DC, USA
　（4月5～7日）
・国際ガラス会議（International Congress on Glass）
　ドイツ・ベルリン（7月3～8日）
・国際閉会式（Closing Conference: A bright future for Glass）
　東京大学＋オンライン（12月8～9日）
・International Year of Glass Debriefing
　米国・ニューヨーク国連本部（12月14日）

国際閉会式の準備においては，コロナの影響もあり，多くの反省点があったが，関係者に助けられて終えることができた。多くのご支援に心から感謝したい。またガラス造形など，これまで知らなかった大きな分野がガラスにはあり，そこには大きな魅力と可能性があることがわかった。

ガラスの科学技術においては，今後大きく進展することを期待している。また，この先も持続性のある発展や国際協調を目指した活動が続くことを期待する。

最後に，清水正 ガラス産業連合会副会長より閉会のご挨拶がありました。その要旨は以下の通りでした。

今年は癸卯の年であり，今までの苦労に一区切りがつき困難が解消され飛躍の年になるとの

ことであるが，為替の乱高下，資材インフレ，サプライチェーンの混乱など非常に厳しい環境である。しかしながら，経済環境の改善を待つのではなく，環境は受け入れて自らの努力によって飛躍の年となる，すべきであると信じている。

国際ガラス年のお話があったが，板硝子協会では，国際ガラス年 2022 建築ガラス記念講演会を 11 月 28 日に開催した。会場には 120 名，Web を含めて 800 名近い参加者があり大盛況であった。また板硝子協会では今年もカーボンニュートラルに向けて努力を継続していく。省エネと健康に配慮した住宅・建築物に使われるエコガラス，防災のための合せガラスなどの普及促進を図っていくとともに，ガラス製造時に発生する CO_2 の削減についても取り組んでいく。

森山 GIC 会長の元，GIC が益々活発に活動し，会員団体，加盟各社の方々が自らのエリアで頑張ることにより，本年が実りある，より良い飛躍の年になることを祈念する。